

ごん吉くんしपोर्ट〜南吉よもやま話〜

第9回 南吉と語り芸



落語、講談、浪曲を
筆頭に、節談説教、説

3月22日は、新美南吉の命日「貝殻忌」でした。その前日、記念館では、南吉童話を講談調で語る「南吉講談席」という行事を行いました（写真）。

講談といっても馴染みのない方が多いかもしれませんが、よく落語と比べられますが、落語が会話によって成り立つのに対して、講談は話を読む芸です。張扇で釈台（机）をパンパン叩いて調子を取りながら、テンポよく軍記物や政談を語ります。話芸としての講談を速記した講談本もよく読まれました。出版大手の講談社が、元は講談本を販売していたのは有名な話です。

南吉の父多蔵も講談が大好きで、南吉の本名の「正八」は、講談のヒーロー、梁川庄八からとったといわれています。庄八は仙台伊達藩を出奔し、各地を旅しては悪人を懲らしめる剣豪で、戦前は水戸黄門と並ぶ人気者だったそうです。父としては、その名にあやかかることで息子が強くたくましく育ってほしいと願ったのでしよう。

教節など、昔は日常の中で様々な語り芸を楽しむ機会がありました。節談説教は浄土真宗の教えを僧がわかりやすく節をつけて話すもの。それに音曲や人形芝居が入り芸能化したものが説教節です。そのうち、名古屋で発展した説教源治節には女芝居も加わり、一時は東京にまで進出しました。南吉は日記に、継母の志んは子どもの頃に源治節が好きで、源治節語りになろうとさえ思っていたと記しています。

また、「最後の胡弓弾き」に描かれた万歳も語り芸の一種といえるでしょう。今、市内では板山地区だけに残っていますが、昭和初期には岩滑地区でも万歳を副業とする家が十軒ほどありました。

南吉は、童話において物語性と分かりやすさを重視しました。それは語り芸が観客を惹きつけるために常に磨いてきたことです。南吉自身も童話を語って聞かせる口演童話を実践していて、中学生の頃には、夜神社の森で練習をすることもありました。

講談や説教節は南吉の親の世代に流行したもので、南吉自身はあまり親しんでいません。しかし、聞き手を意識し、面白く分かりやすくあろうとする語り芸の姿勢は、南吉の童話の中に受け継がれているのではないかと思います。



まちがどVoice

Q 新庁舎の駐車場はいつ完成するのですか？

A 新庁舎の駐車場は、現在、旧庁舎跡地に建設を進めており、平成28年1月に完成する予定です。市民のみなさんには、2月からお使いいただける予定です。

なお、新庁舎駐車場が完成するまでは、隣接する半田病院立体駐車場をご利用ください。ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

市役所新庁舎へのアクセス図

